

社会科学とは何か

—社会科学部で学ぶ人のために—

吉 田 敬

1. はじめに

社会科学とは何か。この問いは易しいようで、なかなか難しい。そう述べると、「なぜそんなに難しいのか。政治学、経済学、法学、商学、社会学、人類学など、社会科学として定着している分野があるではないか」と思う人もいるだろう。

国や地域によって社会科学とみなされるものは異なるけれども、日本においてこうした分野が社会科学として定着していることは事実である。しかし、社会科学としてみなされているものを列挙しても、社会科学とは何かという問いに答えたことにはならない。なぜなら様々な分野を列挙することによって、次のような問いが生じてくるからである。例えば、これらの分野には社会科学として何か共通するものはあるのか。あるいは、先程挙げた分野は同時期に誕生したわけではなく、それぞれに研究を進めていく中で個別の分野として成立してきた。そうだとすると、今後新たな分野が生じる可能性がある。しかし、その新しい分野を社会科学とみなすための基準や定義は何かありうるのか。このように考えると、社会科学とは何かという問いに答えることがそれほど容易ではないことが理解できるだろう。

しかしそうは言っても、社会科学とは何かという問いを全く放置するわけにもいかない。ここでは暫定的な定義として、社会科学を社会についての科学的研究であるとしてみよう。しかし、この定義も十分であるとは言いがたい。というのも、この定義に含まれている社会と科学とはそれぞれどのようなものであるのかが必ずしも明確ではないからである。

この小論では、社会とは何か、そして科学とは何かという二つの問い、それから社会科学という用語（以下「社会科学」と呼ぶ）が誕生した歴史的背景を検討することを通し

* この小論は早稲田大学社会科学部創設 50 周年記念号のために、2016 年 6 月に提出されたものである。本来であれば、その後の研究成果を踏まえて、大幅に改稿する必要があるけれども、諸般の事情により表現などの修正を除いて基本的に 2016 年 6 月時点のままであることをお断りしておく。

で、社会科学とは何かということについて考えてみたい。そうしたところで社会科学とは何かという問いに対する決定的な答えを出すことは難しい。しかし、社会科学部で学ぶ人に更に考えるための何らかの手がかりを提供できるのではないかと思う。

2. 社会とは何か

まず社会とは何かについて考えてみよう。この問いは様々な視点から検討することが可能であるけれども、ここではこの問いに関連してしばしば引き合いに出されるピュシスとノモスの二分法、そして個人主義と集団主義の対立という二つの観点から社会とは何かという問題がどのように考えられてきたのかを概観してみたい。

(1) ピュシスとノモスの二分法と行為の意図せざる結果

それではピュシスとノモスの二分法から見てみよう。この二分法の起源は紀元前5世紀の古代ギリシアにまでさかのぼることができると言われている。この二分法を誰が言いだしたのかについては諸説あり、確定していない。しかし、その当時活動していたソフィストの一人であることは間違いないと思われる (Heinimann [1945] 1983)。

次に、ピュシスとノモスとは何なのかを確認しておこう。ピュシスは普通、自然と訳されている。これに対してノモスは多義的な言葉であり、習慣、あるいは法と訳することができる (富永 1993, 25-26)。ここでは、そうしたものを包括するものとして規約と訳すことにしよう。つまり、ピュシスとノモスの二分法とは自然と規約の二分法と言い換えられる。そして、この規約こそが私たちにとって問題となる社会の同義語とみなされてきたのである。

この二分法において特徴的なのは、自然としてのピュシスは必然的に正しいのに対して、規約としてのノモスは人為的なものであるため、必然的に正しいとは考えられていないことである (Guthrie 1969, 100-101)。なぜなら規約の正しさはそれぞれの規約が置かれている状況や環境に依存する相対的なものだからである。一例として交通規則を考えてみよう。日本では車両は左側通行である。しかし、アメリカでは右側通行であることが知られている。左側通行なのか右側通行なのかは、日本とアメリカでどのように法律として定められたかに依存している。もちろん日本であえて右側を通行したり、アメリカで左側を通行すれば事故に遭う可能性は極めて高くなるし、警察に交通違反で逮捕される可能性もある。しかし必然的に左側通行、あるいは右側通行でなければならないわけではなく、どのような交通規則がそれぞれの国で採用されているかに依存している。

このような二分法が私たちの社会科学観に影響を及ぼしていることは容易に見て取ることができる。物理学に代表される自然科学こそが科学の典型例であり、それに照らし合わ

せて社会科学が科学の名に値するものなのかどうかを考えることが現代では当たり前になっている。これは近代以降、物理学を筆頭に自然科学が目覚ましい成果を上げてきた歴史的経緯もさることながら、自然科学がその研究対象とする自然が必然的に正しいのに対して、社会科学が対象とする規約が人為的で状況や環境に相対的にのみ正しいと捉えられていることに由来している。自然を研究する自然科学に対して、規約を研究する社会科学が一段劣ったものであるかのように語られがちなのは、こうした背景があつてのことである。

しかしこうした背景があるからといって、それを前提として社会科学のあり方を考えなければならぬわけではない。むしろこの二分法を退けることこそが社会科学のあり方を考える上では重要である。ここでは二分法を退けようとした二人の論者——カール・ポパーとフリードリッヒ・ハイエク——がどのような主張をしていたのかを確認してみよう。

ポパーは社会法則と呼ばれるものには二種類あることを指摘した。すなわち、人間が作りだし自らに課す規範法則と社会現象に関する自然法則である。後者をポパーは社会学法則と呼び、こちらが社会科学の研究対象となる。社会学法則ということでポパーが念頭に置いていたのは、経済学における景気循環論などである (Popper 1945, 56 [邦訳 79-80 頁])。このように社会法則を規範法則と社会学法則に分けることによって、ポパーは自然と規約をソフィストたちとは異なる形で捉え直し、社会現象についても科学的研究が可能であることを示そうとしたのである。

ポパーに通ずる観点からピュシスとノモスの二分法を覆そうとしたのが、ハイエクである。彼によれば、この二分法によって本来意図されていた区別は、独立に存在している対象と人間の行為の結果として生み出された対象との区別、あるいは人間の設計からは独立した対象と人間の設計によって生み出された対象との区別であった。しかし、この二種類の区別がきちんと認識されなかったために、ある一つの現象が人によって二通りに解釈されている。すなわち、その現象をある人は人間の行為の結果として生み出されたために人工的であると捉え、別の人は人間の設計の結果として生み出されたわけではないので自然的であると考えたのである。ここで問題なのは、人間の行為の結果ではあるけれども、人間の設計の結果ではない現象がうまく捉えられないことである。ハイエクによれば、人間の行為の結果ではあるものの、人間が設計した結果ではない現象、言い換えれば、行為の意図せざる結果こそが社会科学の研究対象である (Hayek 1973, 20 [邦訳 30 頁])。

しかし、行為の意図せざる結果とはどのようなものなのか。日本でその典型例として挙げられるのが、1973年12月13日に愛知県豊川信用金庫小坂井支店で発生した取り付け騒ぎである。この騒ぎは豊川信用金庫が潰れるというデマを元に発生したものであり、12月13日から17日にかけて引き出されたのは額にしておよそ20億円、延べ人数にして6,600人にも及んだ。

このデマが発生した過程はおおよそ次の通りである。まず12月8日の朝、通学中の女子高生三人が電車内で会話中に就職の話になった。彼女たちのうち一人は豊川信用金庫に就職が内定していたけれども、別の一人が信用金庫はあぶないとからかった。からかわれた女子高生は不安に思ったのか、友人との会話をおばに伝えたところ、おばは豊川信用金庫本店近辺に暮らす義姉に豊川信用金庫の経営状態について問い合わせ、義姉から更に美容院店主に、といった具合にまさに伝言ゲーム形式で小坂井町のクリーニング店夫婦に伝わっていった。この夫婦も当初は半信半疑だったけれども、クリーニング店に電話を借りて来た男性が豊川信用金庫から預金を引き出すようにと家人に伝えていた会話を耳にし、やはり噂は本当だったのだと確信し、自分たちの預金を引き出したばかりでなく、友人・知人などに預金を引き出すように勧めてしまった。デマはそこから拡大の一途をたどることになったというわけである（伊藤・小川・榊 1974, 70-75）。

この取り付け騒ぎの発端になったのは、豊川信用金庫に就職が内定していた友人をからかった女子高生である。しかし、彼女には取り付け騒ぎを起こすつもりはなかったはずである。彼女に何かしらの意図があるとしたら、単純に友人をからかうこと以外にはなかっただろう。それにもかかわらず、彼女の行為は多くの人々を巻き込んだ騒動になってしまった。これが行為の意図せざる結果の一例であることは一目瞭然であろう。ハイエクの考えでは、こうした結果を説明することこそが社会科学の重要な目的の一つである。このように論じることでハイエクはピュシスとノモスの二分法を覆そうとしたのである。

(2) 個人主義と集団主義の対立

ここまで、社会とは何かという問いをピュシスとノモスの二分法の観点から見てきたけれども、次に別の観点から考えてみよう。それが個人主義と集団主義の対立である。前述の二分法が自然との対比を通して社会のあり方を問うものだったのに対して、この対立は個人との関係を通して社会がどのようなものなのかを問うものである。

個人主義と集団主義の対立には存在論と方法論という関連しているものの、異なる要因が絡み合っている。そのため、まず存在論的個人主義と存在論的集団主義の対立を見てみよう。

この存在論とは事物の存在に関する哲学的議論のことである。すなわち、存在論的個人主義と存在論的集団主義の対立とは、存在するのが個人だけなのか、それとも個人だけでなく社会や集団といった集合体も存在するのかという対立である。この点については、存在するのは個人だけであって、社会などというものは存在しないというマーガレット・サッチャーの発言が特に知られている（Thatcher 1987）。この発言は存在論的個人主義の立場を示していると解釈できる。これに対して、個人だけでなく社会も存在するというのが存在論的集団主義である。ここでの争点は社会というものが存在するかどうかである。しか

し、社会とはどのような存在なのかを考え始めると答えははっきりしなくなる。

社会とはどのような存在なのかははっきりしない理由の一つは、机や椅子のような物理的存在とは異なるように思われることにある。物理的存在の中には五感、とりわけ視覚や触覚によって確かめられるものがある。それに対して、社会を視覚や触覚によって確かめることは難しい。もちろん、視覚や触覚によって確かめることができないとしても、社会が存在しないと論じるのは適切ではない。しかしそうは言っても、社会がどのような存在なのかについてはとらえどころがなく、簡単に示すことができないのも事実である。

このような問題に直面し、社会学者は社会とはどのような存在なのかという存在論的議論を迂回し、方法論的議論に関心を向けてきたように思われる。その際には、大きく分けて方法論的個人主義と方法論的集団主義の二つの立場が取られてきた。まず、方法論的個人主義は社会のような概念では曖昧なので、実際に確認できる個人に注目する形で研究を進めようとする立場である。それに対して、方法論的集団主義は個人だけに注目するだけでは不十分で、やはり社会全体というものを念頭に置いて研究する必要があるという立場である。

こうした立場はいずれも「方法論的」という形容詞が付いている以上、本来存在論的立場を含意しているわけではない。つまり、個人主義や集団主義の選択はあくまでも方法としてどのような立場を選択するのかという意味しか本来は持たないはずである。しかし、方法論的個人主義や方法論的集団主義には存在論的議論が見え隠れしている。例えば、方法論的個人主義の源流の一人であるトーマス・ホッブズは、自然状態にある個々人が契約を結ぶことによって社会が成立するという社会契約説を唱えた。この自然状態においては個々人は規則に縛られることのない、いわば前社会的な状態にある (Hobbes [1651] 1996)。もちろん自然状態は現実に存在したわけではないのだから、フィクションである。しかし、この自然状態という仮定には社会の成立を個々人による契約を起源とするという点で明らかに存在論的含意がある。また、方法論的集団主義者として知られるエミール・デュルケムは、個人と社会の関係を無機分子と有機的生命との類比で捉えようとした。デュルケムによれば、社会は個々人の単なる総和ではなく、それ自体独特の实在として現れ、しかも個々人とは別のやり方で思考したり行動したりするのである (Durkheim [1895] 1919, 126-128 [邦訳 206-208 頁])。こうした立場にも存在論的含意があることは見て取れる。ここでは方法論的個人主義と方法論的集団主義それぞれから一例を取り上げたに過ぎないけれども、同じことは他の論者についても指摘することができる。こうした意味で、存在論的議論と方法論的議論は密接に絡み合っている。しかし、方法論的立場は存在論的立場を本来含意しない以上、両者を分ける必要がある。さもないと、方法論的個人主義は存在論的にも個人主義である、あるいは方法論的集団主義は存在論的にも集団主義であることになりかねない。このように方法論と存在論を区別することによって、社会の存在を認めつつ

も方法的には個人主義の立場を取るという第三の立場の可能性が開かれる。ここでは詳細に議論できないけれども、現代の社会科学についての議論はこうした第三の立場をどのような形で提示するのかという方向に収斂しているように思われる。

3. 科学とは何か

ここまで、社会とは何かという問いをピュシスとノモスの二分法、そして個人主義と集団主義の対立という二つの観点から検討してきた。社会とは何かという問いに確定的な答えを出せたわけではないけれども、どのようなことが哲学的に問題となっているのかを理解してもらえたのではないかと思う。それでは、次に科学とは何かという問いを考察してみよう。

(1) 科学と科学ではないものの境界設定問題

この問いに対する典型的な答えは、科学とは世界について何らかの知識を得る営みであるというものである。しかし、この答えは必ずしも十分なものとは言えない。なぜなら科学ではないと普通みなされる営みでも世界についての知識を得られるように思われるからである。例えば、占星術や血液型占いを考えて見れば良い。占星術によれば、天体の位置や動きによって世界や社会のあり方を占うことができる。また、血液型占いにおいては、人間の性格がO型、A型、B型、AB型という四つの血液型によって分類できるとされる。あるいは瞑想によっても私たちは何らかの知識を得られる場合がある。その意味では、占星術、血液型占い、そして瞑想は世界、社会、それから人間のあり方について何らかの知識をもたらすことになる。しかし、このいずれも科学的であるとは普通考えられていない。

それでは、科学と科学ではないものの違いはどこにあるのか。科学と科学ではないもの間に境界線を引こうとする問いは科学哲学において境界設定問題と呼ばれている。この問題に対する科学哲学上の伝統的な答えは科学には独自の方法があるというものである。科学方法論が科学哲学において重要な位置を占めている理由はここにある。しかし、科学の独自の方法、すなわち科学的方法がどのようなものであるのかという点について、見解の一致は見られておらず、いまだに議論が行われている。

例えば、科学は観察に基づく、実験を行う、あるいは、再現可能であるなどの形で科学的方法を特徴づけようとしてみよう。ところが、こうした形で科学的方法を特徴づけることにはそれぞれ難点がある。仮に科学は観察に基づくとしても、占星術も天体の動きを観察しているので、科学と占星術をうまく区別できない。また、科学は実験を行うという形でも、全ての科学が実験を行っているとは言いがたい。これは古生物学や天文学を考えて

みれば良い。あるいは、これまでは社会科学も実験可能ではないと言われてきた。しかし、近年の社会科学においては実験経済学や実験社会科学のように実験に取り組む分野が発展してきているため、社会科学は実験可能ではないというのは正しくない。ただそうは言っても、実験が科学であることの条件であるとみなすことは難しい。

こうした中、科学哲学者たちは様々な方法論を提示することによって、科学と科学ではないものを区別しようとしてきた。その中には、帰納主義や反証主義などがある。ここではそれぞれの方法論について詳細に検討することはできないけれども、簡単に見ていこう。

(2) 帰納主義とその難点

まず、帰納主義とは同じような個別事例の積み重ねから一般法則を導き出そうとする立場である。この立場の起源は歴史的には少なくともフランシス・ベーコンにまでさかのぼることができる。帰納主義の具体例としては、これまで観察された物体が万有引力の法則に従うことから全ての物体が万有引力の法則に従うという一般法則を帰納的に導き出そうとすることが挙げられる。しかし、こうした帰納主義には問題があることが指摘されている。その一つとしてはデイヴィッド・ヒュームによる批判がある。ヒュームによれば、帰納主義は自然の斉一性を前提としている。自然の斉一性とはこれまでに調査された事柄がこれから調査される事柄と類似することを意味する。ところが、ヒュームの考えでは、この自然の斉一性そのものの正しさを示すことはできない。なぜなら自然が斉一ではない世界を私たちは想像できるからである。そうかといって、自然の斉一性はこれまで成立してきたのだから、正しいはずであると論証することもできない。というのも、この論証そのものが帰納的に導出されるという循環論法に陥ってしまうからである (Okasha 2002, 24-27 [邦訳 27-31 頁])。

(3) 反証主義とその批判

帰納主義が抱えるこうした問題に直面して、科学哲学者たちは様々な方法でヒュームが提示した問題を解決しようとしてきた。その一つにカール・ポパーが提唱した反証主義がある。ポパーは先程述べた境界設定問題に対する回答として反証可能性の基準を提案した。彼の考えでは、科学理論とは反証可能でなければならない。すなわち、どのような理論であれ、反証可能ではない場合には、それは科学理論ではないのである。

しかし、ポパーの言う反証可能性とはどのようなものなのか。これは科学理論から導きだされた予測が経験的にテストされた際に原理的に反証可能でなければならない、すなわち間違っていることが示されうるものでなければならないことを意味する。このような主張をするにあたって、ポパーはアルベルト・アインシュタインの議論に触発されていた。

アインシュタインの予測によれば、光は重い物体に引きよせられるため、太陽に近い恒星から発した光は太陽の影響で太陽から実際よりも少し離れた角度で見えるはずである。ところが、太陽は非常に明るいため、このことが観察できるのは日蝕の間だけである。そこで、アーサー・エディントンをはじめとする観察隊は実際に観察を行い、アインシュタインの予測が正しいことを確認した。ポパーがアインシュタインを評価したのは、アインシュタインが反証可能な予測を行ったことにある。確かに、エディントンたちによってアインシュタインの予測の正しさは示されたものの、自分の理論が間違っているかもしれないというリスクをあえてアインシュタインは取った。ポパーの考えでは、アインシュタインの態度こそが科学者の取るべき態度なのである (Popper 1957, 158-160 [邦訳 62-64 頁])。

こうした反証可能な理論に対して、ポパーが反証可能でない理論の例として挙げたのは、マルクス主義、ジークムント・フロイトの精神分析、そしてアルフレッド・アドラーの心理学である。まず、マルクス主義に関しては、その予測のいくつかは実際に反証されているにもかかわらず、マルクス主義者はそれを受け入れようとはしない。むしろその代わりに、理論と証拠が一致するように再解釈することで理論を反証から救おうとする。ポパーはこうしたやり方によってマルクス主義はその科学としての身分を自ら損なっていると批判した。次に、フロイトの精神分析とアドラーの心理学については、ポパーはどちらも興味深いことを述べているけれども、単純に反証可能ではないと指摘した。彼らの心理学的洞察は経験的にテスト不可能な神話なのである。このように論じることによって、ポパーは科学と科学ではないものを区別しようとした (Popper 1957, 161-162 [邦訳 64-65 頁])。

ポパーの反証主義には批判がなかったわけではない。そうした批判の一つに、反証されたからといって科学者は直ちに理論を退けるわけではないことが挙げられる。このことを示すのに使われる事例として、海王星の発見がある。ニュートン理論は惑星の軌道を予測することを可能にしたけれども、天王星の軌道に関しては問題があった。この点について、ジョン・クーチ・アダムズとユルバン・ルヴァリエは未発見の惑星が天王星に影響を与えているのではないかとそれぞれ予測し、実際にその惑星の質量と位置を計算した。その後アダムズとルヴァリエの予測とほぼ相違することなく海王星が発見された。これが反証主義にとって問題になる理由はアダムズとルヴァリエの振る舞いが前述のマルクス主義者の振る舞いと変わらないように思われるからである。つまり、マルクス主義者を批判しながら、アダムズとルヴァリエを批判しないのは公平性を欠くのではないかというわけである (Okasha 2002, 15-16 [邦訳 17-18 頁])。

こうした批判に対しては、反証主義が示しているのは理論と証拠に論理的に矛盾が生じていることだけであって、反証されたからといって直ちに理論を放棄しなければならないわけではないと答えることが可能である。もちろんこれに対しても、それでは反証主義が提案していることは科学的探求のためのアルゴリズムでも何でもなく、理論を放棄したほ

うが良いのか支持し続けたほうが良いのか、全ては推測にとどまってしまうのではないかと
いう反論がありうる。こうした反論に対しては、反証に直面した際に新たに補助仮説を導入
する場合には、その仮説は独立にテストされ、また理論の反証可能性を高めなければなら
ないと答えることができる（小河原 2010, 121）。つまり、あくまでも理論の反証可能性を
高めるといふ観点から理論を支持し続けるべきなのを考えなければならない。しかし、
こうした回答を持ってしてもポパーの反証主義は少なくとも科学哲学においては広範に支
持されているとは言いがたく、科学と科学ではないものを分ける明確な基準を設定するこ
とは難しいと主張したり、境界線を引くことなしに境界設定問題を解決しようとする科学
哲学者もいるのが現状である（Okasha 2002, 17 [邦訳 19 頁]；伊勢田 2003）。

ここまで科学とは何かという問いを検討するにあたって、科学哲学における境界設定問
題を見てきたけれども、科学と科学ではないものを明確に分けること自体の難しさが見て
取れる。だからといって、科学と科学ではないものに全く違いがないと主張してしまえ
ば、何でもありになってしまう。その場合には、科学でないものを理科教育の現場から排
除できないなどの問題が生じる。そうした意味ではどのような科学であろうと備えておく
べき最低条件がやはり必要ではないかと思われる。もちろん個別科学がそれぞれに目覚ま
しい発展を遂げている状況では、全ての条件を網羅することなど不可能である。しかし、
そのような最低条件を提示するという意味ではまだ反証可能性の意義は失われていないの
ではないかと思われる。

4. 「社会科学」という用語の歴史

前二節では、社会とは何か、そして科学とは何かという、二つの問いについて検討して
きた。ここからは少し角度を変えて、「社会科学」の歴史を見ていきたい。ただ、この用
語が初めて現れたのがいつだったのかを確定するのは歴史上書かれた全ての文書を調べる
わけにもいかない以上、確定的な答えを出すことは難しい。したがって、以下で示すのは
あくまでも暫定的な答えでしかなく、今後も研究し続けられるものであることに注意する
必要がある。

(1) イギリスでの初期の用法

英単語の歴史的用法を紹介していることで知られるオックスフォード英語辞典のオンラ
イン版に掲載されている項目「社会科学」（“social science, n.”）によれば、1770 年頃にイ
ングランドの詩人マーク・エイクンサイドがウィリアム・シェイクスピアに関連して使っ
たものが初出とされている（Akenside 1772, 309）。次に挙げられている使用例は、1785 年に

スコットランドの著述家であるジョン・ピンカートンがロバート・ヘロンの筆名を用いてフランシス・ベイコンの立場を紹介しているものである (Pinkerton 1785, 331)。ここからして、また後に紹介するベイカーの議論からすると、1829年から1836年にかけてジョン・スチュアート・ミルたちが使い始めたという説やそれ以前にフランスでシャルル・フーリエが1808年に使っていたという説は受け入れがたい (Senn 1958; Burns 1959; Iggers 1959)。しかし、エイクンサイドとピンカートンのいずれもシェイクスピアやベイコンに関する文脈において使っており、誕生しつつある新しい分野としての社会科学を指しているとは言えないという問題がある。

(2) フランスでの初期の用法

そういう意味で注目すべきなのはフランスの状況である。この点について参考になるのが、キース・マイケル・ベイカーの論文である。この論文は1964年に出版された古いものではあるけれども、私見では後になっても彼の主張を覆すような説は提示されていないように思われる (Head 1982; Claeys 1986)。そこで以下ではベイカー説を紹介する形で、「社会科学」の歴史をたどってみたい。

ベイカーによれば、「社会科学」の誕生において重要な時期はフランス革命の頃であり、それに関わっている重要人物の一人がニコラ・ド・コンドルセである。コンドルセは1782年にアカデミー・フランセーズで講演を行い、彼が「道徳科学」ないし「道徳・政治科学」と呼ぶ分野は物理科学と同じように進歩すると主張した。彼は社会秩序の形成のために断片的になっている道徳・政治科学を一つにすることが必要であると考えていた。このような関心の下、彼は1790年春にアベ・シエイエスたちとともに1789年協会 (Société de 1789) を設立した。そこでは体系的な社会研究の重要性が論じられていた。1789年協会自体の活動は資金に乏しいことや会員を統合するような明確な政治的な関心を共有できなかったこともあって、1790年の終わりには弱まっていった。しかし、この1789年協会での議論が「社会科学」(science sociale) の誕生につながっていったのではないかと考えられている。現存する記録では、1789年協会の一員でもあったドミニク = ジョセフ・ガラによる使用例がある。ガラは1791年12月にコンドルセに送ったパンフレットの中で「社会科学」を用いていたけれども、ガラが初めて用いたかどうかは定かではない。しかし、コンドルセ自身も1792年1月30日の公共教育委員会において使っていたことから判断して、1790年頃には1789年協会の関係者間で使われ始めたのではないかと思われる (Baker 1964, 211-220)。ガラ自身はこの用語を否定的に捉えていたけれどもコンドルセは肯定的に捉え、平等という理念を達成するために日本の高等学校に相当するリセの教育プログラムに社会科学を導入しようと企んでいたとされる (市野川 2006, 144-145)。

この新しく生み出された用語である「社会科学」はどのように広まっていったのか。特

に英語圏への普及という面で大きな役割を果たした人物として、ベイカーが注目するのがアントワヌ・デステュット・ド・トラシーとアメリカ第3代大統領トーマス・ジェファーソンである。トラシーはイデオログと呼ばれるフランスの急進的な啓蒙主義者たちを代表する人物の一人として知られている。彼は1806年から1807年にかけて、シャルル＝ルイ・ド・モンテスキューの著作について検討を行い、そこで社会科学の概念を発展させた。トラシーは1807年にモンテスキューの『法の精神』についての著作を完成させた。しかし当時のフランスはナポレオン・ボナパルトの支配下であり、トラシーをはじめとするイデオログに対してナポレオンは敵意を持っていた。そのため、トラシーはフランスでの自著の出版を断念し、イデオログの支援者であったジェファーソンに助けを求めた。ジェファーソンはトラシーの著作の翻訳を検討し、匿名にせざるを得なかったトラシーの正体を隠すために出版社への紹介状を執筆することまで行った。その結果として、フランスで新たに誕生した *science sociale* がアメリカにも *social science* と翻訳されて広まっていくことになった。しかし、アメリカと同じく英語圏に属するイギリスではトラシーの著作に対する反応が見られなかったこともあり、あまり広まらなかったようである (Baker 1964, 222-224)。

「社会科学」のイギリスへの本格的な導入はスペインのベンサム派を通してではないかというのがベイカーの考えである。スペインでは1820年代頃ベンサムの著作の翻訳が出版されておりその副題には「社会科学」(*ciencia social*) が用いられていた。注目すべきなのはまさにその時期にトラシーの著作もスペインで紹介されつつあったことである。ベイカーはこうした状況証拠に基づいて、トラシーの用語をベンサムの立場を紹介する際に応用したのではないかと推測した (Baker 1964, 224-226)。

ここまで「社会科学」という用語がいつ、どのように誕生したのかをベイカーの説を紹介する形で見てきた。もちろんベイカー自身が認めるように、更に研究が進めばベイカーの説が間違っている可能性は十分にある。ただ仮に「社会科学」自体がエイクンサイドやピンカートンの使用例のようにフランス革命以前から用いられていたとしても、それに社会改革を行うための新しい分野としての意味が与えられたという意味では、フランス革命期のコンドルセをはじめとする論者の重要性は否定しがたいように思われる。

このような形で誕生した「社会科学」という用語がどのように一般に定着するようになったのかについては筆者の力量を遥かに超えるため、ここでは詳細に検討できない。ただ市野川容孝によれば、フランス語圏ではアンリ・ド・サン＝シモン、ジャン＝シャルル＝レオナルド・シモンド・ド・シスモンディ、そしてオーギュスト・コントたちによって、英語圏ではウィリアム・トムソンやジョン・スチュアート・ミルによって、ドイツ語圏ではフリードリッヒ・ブーフホルツ、モーリツ・フォン・ラヴェルニュ＝ペギラン、そして

ロベルト・フォン・モールたちによって、新しく誕生した社会科学についての構想が提示された。しかし、そこでは基本的に個人主義に対立するものとして社会科学が考えられていた（市野川 2006, 148-188）。ところが第2節で見てきたように、現代の社会科学は個人主義と対立するものとしてではなく、むしろそれを包摂するものとして考えられている。その意味では、ある時点で社会科学の捉え方に大きな転換が起こったことになる。

5. おわりに

この小論では、社会とは何か、そして科学とは何かという二つの問い、それから「社会科学」という用語の歴史を手がかりにして、社会科学とは何かという問いを検討してきた。冒頭にも述べたようにこの問いに対して確定的な答えを出せたわけではない。しかし、社会科学には様々な哲学的問題が潜んでいることが理解してもらえたのではないと思う。むしろ、この問いに対して既存の答えで満足するのではなく、社会科学を学んでいく中でこの問いを考え続けていくことが重要である。言い換えれば、社会科学とは何かという問いに対する答えは研究活動の中にこそ見いだされるべきものなのである。ただ、その中でどのような答えにたどり着こうとも、私たちが直面している様々な問題を研究することこそが求められていることを理解しなければならない。そのことを忘れて、社会科学の定義づけに熱中したり、あるいは個別社会科学の違いにこだわるのは本末転倒でしかない。この点についていまだに参考になるのは、私たちは問題の研究者であって、主題の研究者ではないことをポパーが強調したことである。彼の考えでは、分野は歴史的な、あるいは行政上の理由などの理由で区別されているだけで、問題は主題や分野の垣根を越えて生じるものなのである（Popper 1952, 124-125 [邦訳 111 頁]）。このように問題解決として科学を位置づけた場合、社会科学、ひいては科学そのものは自ずと学際的なものにならざるを得ない。それどころか、科学はそもそも学際的なものなのだとさえ言えるかもしれない。これは個別科学において行われている基礎的な研究成果を無視して良いということではない。個別科学で行われている研究成果に十二分に注意を払いつつ、学際的な取り組みが求められている問題と格闘することに意義がある。確かに私たちが個人で研究できることには限りがある。しかし、科学は私たちの知識を少しでも発展させようという集合的な営みであり、それは社会科学についても変わることはない。社会科学部で学ぶ人にはその集合的な営みに積極的に参加することが求められているのである。

参考文献

日本語文献

伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』名古屋大学出版会、2003年

市野川容孝『社会』岩波書店、2006年

伊藤陽一・小川浩一・榎博文「デマの研究——愛知県豊川信用金庫“取り付け”騒ぎの現地調査」『総合ジャーナリズム研究』No. 69: 70–80、1974年

小河原誠『反証主義』東北大学出版会、2010年

富永健一『現代の社会学者——現代社会科学における実証主義と理念主義』講談社学術文庫、1993年

外国語文献

Akenside, M. *The Poems of Mark Akenside, M.D.* London: Printed by W. Bowyer and J. Nichols; and sold by J. Dodsley, 1772. *Eighteenth Century Collections Online*. Gale. Waseda University Library. <http://find.galegroup.com.ez.wul.waseda.ac.jp/ecco/infomark.do?&source=gale&prodId=ECCO&userGroupName=waseda&tabID=T001&docId=CW115670348&type=multipage&contentSet=ECCOArticles&version=1.0&docLevel=FASCIMILE> (Accessed May 29, 2016).

Baker, K. M. “The Early History of the Term ‘Social Science,’” *Annals of Science*, 20 (3): 211–226, 1964.

Burns, J. H. “J. S. Mill and the Term ‘Social Science,’” *Journal of the History of Ideas*, 20 (3): 431–432, 1959.

Claeys, G. “‘Individualism,’ ‘Socialism,’ and ‘Social Science:’ Further Notes on a Process of Conceptual Formation, 1800–1850,” *Journal of the History of Ideas*, 47 (1): 81–93, 1986.

Durkheim, É. *Les Règles de la méthode sociologique*. Septième éd. Paris: Librairie Félix Alcan, [1895] 1919. (邦訳、E・デュルケム [宮島喬訳]『社会学的方法の規準』岩波文庫、1978年)

Guthrie, W. K. C. *The Fifth-Century Enlightenment*. Vol. 3 of *A History of Greek Philosophy*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1969.

Hayek, F. A. *Rules and Order*. Vol. 1 of *Law, Legislation, and Liberty*. Chicago: University of Chicago Press, 1973. (邦訳、F・A・ハイエク [矢島鈞次・水吉俊彦訳]『法と立法と自由 I ——ルールと秩序』春秋社、1987年)

Head, B. W. “The Origins of ‘La Science Sociale’ in France, 1770–1800,” *Australian Journal of French Studies*, 19 (2): 115–132, 1982.

Heinimann, F. *Nomos und Physis: Herkunft und Bedeutung einer Antithese im griechischen Denken des 5. Jahrhunderts*. Basel, Switzerland: Verlag Friedrich Reinhardt, 1945. (邦訳、F・ハイニマン [廣川洋一・玉井治・矢内光一訳]『ノモスとピュシス——ギリシア思想におけるその起源と意味』みすず書房、1983年)

Hobbes, T. *Leviathan*. Revised student ed. Edited by R. Tuck. Cambridge, UK: Cambridge University Press, [1651] 1996. (邦訳、T・ホッブズ [水田洋訳]『リヴァイアサン』全4巻、岩波文庫、1982–1992年)

Iggers, G. G. “Further Remarks about Early Uses of the Term ‘Social Science,’” *Journal of the History of Ideas*, 20 (3): 433–436, 1959.

Okasha, S. *Philosophy of Science: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford University Press, 2002. (邦訳、S・オカーシャ [廣瀬覚訳]『科学哲学——1冊でわかる』岩波書店、2008年)

Pinkerton, J. *Letters of Literature*. By Robert Heron, Esq. London: Printed for G. G. J. and J. Robinson, 1785. *Eighteenth Century Collections Online*. Gale. Waseda University Library. <http://find.galegroup.com.ez.wul.waseda.ac.jp/ecco/infomark.do?&source=gale&prodId=ECCO&userGroupName=waseda&tabID=T001&docId=CW109794343&type=multipage&contentSet=ECCOArticles&version=1.0&docLevel=FASCIMILE> (Accessed May 29, 2016).

Popper, K. R. *The Spell of Plato*. Vol. 1 of *The Open Society and Its Enemies*. London: George Routledge & Sons, 1945. (邦訳、K・R・ポパー [内田詔夫・小河原誠訳]『開かれた社会とその敵——第一部 プラトンの呪文』未來社、1980年)

Popper, K. R. “The Nature of Philosophical Problems and Their Roots in Science,” *British Journal for the Philosophy of Science*, 3 (10): 124–156, 1952. (邦訳、K・R・ポパー [藤本隆志・石垣壽郎・森博

- 訳]「哲学的諸問題の性格と科学におけるその根源」『推測と反駁——科学的知識の発展』法政大学出版社、110-153、1980年)
- Popper, K. R. "Philosophy of Science: A Personal Report," In *British Philosophy in the Mid-Century: A Cambridge Symposium*, edited by C. A. Mace. London: George Allen and Unwin, 155-191, 1957. (邦訳、K・R・ポパー [藤本隆志・石垣壽郎・森博訳]「科学——推測と反駁」『推測と反駁——科学的知識の発展』法政大学出版社、57-109、1980年)
- Senn, P. R. "The Earliest Use of the Term 'Social Science,'" *Journal of the History of Ideas*, 19 (4): 568-570, 1958.
- "social science, n." OED Online. March 2016. Oxford University Press. <http://www.oed.com/view/Entry/183756?redirectedFrom=social+science> (Accessed May 29, 2016).
- Thatcher, M. "Interview for *Woman's Own* ('no such thing as society')." September 23, 1987. Margaret Thatcher Foundation. <http://www.margarethatcher.org/document/106689> (Accessed May 29, 2016).